

事業所名 グループホーム やすらぎ荘

日付 平成18年3月6日

特定非営利活動法人

評価機関名 ライフサポート

評価調査員 在宅介護経験14年、家族の会代表経験7年

評価調査員 在宅介護経験15年

自主評価結果を見る (まだリンク先はありません)

評価項目の内容を見る

事業者のコメントを見る(改善状況のコメントがあります！)

I 運営理念

番号	項目	できている	要改善
1	理念の具体化、実現及び共有		
記述項目	グループホームとしてめざしているものは何か		
	このグループホームの目指すものの冒頭に「家庭的な生活空間で…」とある、大家族風な家庭的な生活を自然な形で実践しようとしている事が窺える。「家庭的な…」ということは、飾りや建材の種類や色彩だけでなく、そこに棲んでいる人、つまり利用者がどれだけ自分らしく生活しているかである。それは利用者や職員の言葉や、表情、行動等から現れるものであると考える。スタートしてまだ間もなく、比較的軽度の利用者が多い段階で、良い形の家族的な雰囲気醸成されていることを拠り所に、ホームのあり方の基盤作りを前向きに作って行く段階にあるといえましょう。「暮らしの支援」「健康面の管理」「地域との交流」の3本柱を積極的に進めていってほしい。出来れば毎年の課題理念(スローガン)を、職員の全員参加の討議で作られるように提案したい。		

生活空間づくり

番号	項目	できている	要改善
2	家庭的な共用空間作り		
3	入居者一人ひとりに合わせた居室の空間づくり		
4	建物の外回りや空間の活用		
5	場所間違い等の防止策		
記述項目	入居者が落ち着いて生活できるような場づくりとして取り組んでいるものは何か		
	住居型のケアハウスのような建物を活用して、グループホームに改修したものの、各居室は1LDKタイプになっていて、広縁付き6畳間に押し込みがあり、トイレと洗面台も備え付けられている広々と思われた部屋である。ある意味では理想のグループホームの部屋構成と言ってくれたいと感じた。利用者は現在は殆んど寝るだけに使っているようで勿体ないくらいである。各部屋の入口には、各人の特徴ある写真が貼ってあり、その中に名前が表示されていて自分の部屋は分かりやすい。 共用スペースは、食堂と厨房と小さな畳み敷き休息ゾーンが中央に位置していて、木をふんだんに使った暖かみのある雰囲気となっている。また、別室に大きい間が配置されていて、時々に合わせて、各人思い思いの居場所が確保できるようにしているのも嬉しい。		

ケアサービス

番号	項目	できている	要改善
6	介護計画への入居者・家族の意見の反映		
7	個別の記録		
8	確実な申し送り・情報伝達		
9	チームケアのための会議		
10	入居者一人ひとりの尊重		
11	職員の穏やかな態度と入居者が感情表現できる働きかけ		
12	入居者のペースの尊重		
13	入居者の自己決定や希望の表出への支援		
14	一人でできることへの配慮		
15	入居者一人ひとりに合わせた調理方法・盛り付けの工夫		
16	食事を楽しむことのできる支援		

講評

全体を通して(特に良いと思われる点など)

「ご飯ですよー!」の職員の声が廊下から聞こえる。何処の家でもお母さんが台所から家族全員に知らせる懐かしい呼び声。利用者と一緒に備中神楽の話に夢中になっている時だった。「食堂へいらして下さい」の誘いに、利用者と一緒にぞろぞろと廊下を食堂へ行く、朝このグループホームを訪れた時に調理を手伝っていた2人の利用者がエプロン姿で「ご飯あがりー」と出迎えてくれた。この呼び声、この風景、まさに大家族の暮らしそのものを感じ、嬉しかった。

普通、日本では1LDKとなっている間取りの設計が殆んどであるが、このホームはDKとLが離れて独立しており、食事の時と寛ぎのリビングルームが分離しているため、こうした光景が生まれてくる。食事以外の時間は殆んどの利用者はリビングルームでテレビを見たり、談笑しあり、編み物など好きなことをして過ごしている。

「施設のような殺風景ではなく、幼稚園のようでなくありたいと思う」このグループホームの雰囲気は、大人の上品な感覚である。「お茶碗と箸、コーヒーカップは利用者自身のものを用意し、職員は箸とコップを自身で用意、少しでも自分らしい物を生活の周りにという配慮が窺える。こうした配慮は個々人の部屋のしつらえにも反映されていて、「住まい」としてのホームと納得させられる。

昨年暮れには、地域の人々が藁を持ち寄って、利用者や職員も一緒になって注連縄を作りホームの飾りをしたそう。その際の写真が掲示されていて、生き生きとした暮れの行事の様子が想像された。また、その一角にはホームの様々な生活ぶりを撮った写真が貼ってあり、四季折々の思い出が湧く工夫が施されている。また、職員の年齢構成も20~60才代とバラエティに富み、男性3名女性4名の性別バランスも家族の特性を思わせる良さを感じた。そして、神楽太夫や環境コーディネーターなどの特異な資格を持つ職員が居る事も生活の潤いを広げる力になっている事であろう。

特に改善の余地があると思われる点 次のような提案をした

昨年4月に開設したばかりのホームで、ケアの質やサービスの質の向上を目指して試行錯誤中の切実な努力が感じられた。現在の利用者の要介護度は比較的軽度の人が多く、全体としての生活のまとまりがとりやすい状況といえよう。高齢者は1年1年精神的、肉体的能力が変化していく。機能維持の為に個々人に見合った中長期的なリハビリを今から計画・実行して生活支援を図って頂きたい。まさに、認知症介護予防の実践がテーマであるといえそうである。それらを通して、職員全員で理念を練り上げ、確信にして欲しい。

既存の建物を改修したグループホームであるが、全体的には広いスペースで、利用者もゆったり生活出来ている素晴らしい環境といえよう。屋内外の空間や、地域の環境の使い方をもっと前向きに考えて、利用者の行動範囲をもっと広げてあげて欲しい。

III ケアサービス(つづき)

番号	項目	できている	要改善
17	排泄パターンに応じた個別の排泄支援		
18	排泄時の不安や羞恥心等への配慮		
19	入居者一人ひとりの入浴可否の見極めと希望にあわせた入浴支援		
20	プライドを大切にしたい整容の支援		
21	安眠の支援		
22	金銭管理と買い物支援		
23	痴呆の人の受診に理解と配慮のある医療機関、入院受け入れ医療機関の確保		
24	身体機能の維持		
25	トラブルへの対応		
26	口腔内の清潔保持		
27	身体状態の変化や異常の早期発見・対応		
28	服薬の支援		
29	ホームに閉じこもらない生活の支援		
30	家族の訪問支援		
記述項目	一人ひとりの力と経験の尊重やプライバシー保護のため取り組んでいるものは何か		
	玄関を入ると「よくいらっしゃいました…」と、大きな全職員の写真入パネルが出迎えてくれる。食堂のテーブルでは、2人の利用者が太い牛蒡を包丁で金平風に削り、竹輪を細かく切って食事作りに余念がない。「この鮭も細かくくずして下さいませか」と職員が細かく仕方を見せながら一緒に作業を進め、手順を示して、納得したらお願いすると言う。しっかりした意思伝達ははかかっての取り組みに目を引いた。「他に何を入れようか」「これどう?」干し椎茸を出して、利用者や相談しながら調理を進めていく。利用者と共に作ったバラ寿司は美味しく、皆の食欲をそそっていた。 70代前半の若手のまだ元気な男性の利用者は、仕事にきている雰囲気、灯油の運搬やストーブへの注入など力仕事に積極的に協力して体を動かしているのが、ホームの生きた生活感を感じさせた。		

IV 運営体制

番号	項目	できている	要改善
31	責任者の協働と職員の意見の反映		
32	家族の意見や要望を引き出す働きかけ		
33	家族への日常の様子に関する情報提供		
34	地域との連携と交流促進		
35	ホーム機能の地域への還元		
記述項目	サービスの質の向上に向け、日頃から、また、問題発生を契機として、努力しているものは何か		
	グループホームの自己評価結果を見ると、これから改善していかなければならないと評価している点が多い。事前アンケート調査の結果からも、生活支援の対応や、職員の意識改革の面での悩みや反省が率直に色濃く表明されている。ホーム開設未だ10ヶ月しか経っておらず、職員の半数位は未熟な人がある中で、不十分な点があることは当たり前とも言える。しかし、短期間ではありながら職員の利用者への関わり方や利用者の生活ぶりを見ると、居心地の良い優れた生活環境を作っていると言える。むしろ、現状に対する厳しい自己分析の姿勢こそ、あるべきケースを目指す礎になると評価したい。ケアの原点はまさに人間性、人間の心ですることが重要なので、自信を持って一つずつサービスの向上を積み上げていけば良いと思われる。 3年~4年先を展望しつつ、マンネリを克服する為に認知症ケアの研修を不断に、かつ系統的に行って、利用者のレベルダウンにも対応できる力量を養成するよう念願する。		